



女性医師の窓

「みみずくクラブ」と私

ひろせクリニック 廣瀬 みずき

私には生来、両側の低音障害型感音難聴がある事から両耳に補聴器を使用しており、その縁から耳鼻科医となりました。平成21年に金沢大学病院勤務に戻ったのを機会に小児難聴をライフワークとして診療活動を行っています。平成24年11月呼吸器内科の兄と一緒にひろせクリニックを開業し、現在も金沢医療センターで週1回木曜日のみ小児難聴外来を担当しています。

近年、自動的に難聴有無をチェックできる新生児聴覚スクリーニング検査が普及した事で生後1か月には聴力精査が開始され、生後6か月以内に難聴の確定診断が可能となりました。超早期に乳幼児の難聴診断がなされる事は保護者への大変な精神的負担となりますが公的な支援機構はありません。そこで平成22年9月に耳鼻科医有志が中心となり、難聴児と保護者への療育支援を目的とした支援センター「いしかわ 赤ちゃんきこえの相談支援センター／みみずくクラブ」を立ち上げました。この「みみずくクラブ」では難聴児教育専門家、耳鼻咽喉科医師、言語聴覚士の三者がボランティアで難聴の教育と療育相談を行っており、私も参加しています。みみずくクラブには現在まで61組の保護者が来られましたが、とても勉強熱心な方から一生懸命説明しなければ理解できない方まで様々です。難聴児には補聴器装用とその後の療育機関へのつながりが重要ですが、ごく一部には金銭的問題や家庭内事情で放置される子供もいます。最近みみずくクラブの活動で感じるの、親の“教育”への熱心さが子供のその後を左右するという事です。高度～重度難聴の子供であっても両親が熱心に療育に取り組むと補聴器だけでも大変きれいな日本語／聴覚言語を話します。その逆の場合はご想像の通りです。

先にも書きましたが、自分の難聴が診断されたのは中学1年生の時でした。当時はみみずくクラブのような形態の相談機関はなく、両親はその診断に困惑したようで、納得するまでいくつもの病院を受診した覚えがあります。最終的に日常生活や学業には補聴器が必要、と納得して耳掛け型補聴器を装用する事になりましたが、当時から高額な補聴器をすぐ購入してくれたのは大変ありがたい事だったのだと今更ながら感じます。父は整形外科医として開業しており、真面目に誠実に働く姿を見て育ってきたことから自分も医師の道を選びました。卒業後に耳鼻咽喉科を選考した理由は単純に「耳が悪いから」というものでしたが、現在小児難聴専門の耳鼻咽喉科医師として活動できているのは、両親が私の難聴故の不自由を考慮して教育に熱心に取り組んでくれ、かつ、私をいつも励まし支えてくれたおかげであり、本当に感謝してもしきれません。

今後も臨床外来とみみずくクラブの活動を通して、自分と同じように難聴児とその保護者を支えていけるよう、一層努力してゆきたいと思っています。